

第二節 二十七、八年戰役ヨリ大正三年ニ至ル時代

明治二十七年七月海軍軍令部長子爵中牟田倉之助ハ西郷海軍大臣ニ商議スルニ軍港要港ノ守備及防禦部隊統理上ノ必要ニ依リ此ノ際水雷隊條例ヲ改正セムコトヲ以テセリ其ノ要旨トスル所ハ水雷隊司令官ノ下ニ艇隊司令及敷設隊司令ヲ置キ艇隊司令ハ司令官ノ命ヲ承ケ艇隊一隊ヲ薫督訓練シ水雷艇及之ニ屬スル水雷及要具ヲ整備シ近海ノ水路ヲ研究シ隊中ノ事務ヲ掌理シ敷設隊司令ハ司令官ノ命ヲ承ケ敷設隊一隊ヲ薫督訓練シ水雷及要具ヲ整備シ隊中ノ事務ヲ掌理スト云フニアリ而シテ本案ハ爾後慎重ナル攻究ヲ遂ゲ二十九年一月二十日ヲ以テ左記水雷團條例ヲ裁可シ之ヲ公布ニ依リ實現スルコトトナレリ之ガ理由書左ノ如シ

水雷團條例制定理由

敷設水雷及攻撃水雷ハ砲臺ト共ニ港灣防禦ノ主幹タルコト固ヨリ論ヲ俟タズ然ルニ現行水雷隊條例ニ由レバ水雷隊ハ敷設攻撃各獨立シテ統轄スルモノナリ實驗上其ノ不便少ナカラザルヲ知ル依テ水雷隊條例ヲ廢シ水雷團條例ヲ制定スルノ必要ヲ認ム

水雷團條例摘要 (二十八年一月二十日公布ノ分)

一、各軍港ニ水雷團ヲ置ク

二、水雷團ハ鎮守府ニ屬シ水雷防禦ノコトヲ掌ル所トス
 三、水雷團ニ左ノ職員ヲ置ク

團長 海軍大佐 副官 海軍大尉

機關長 海軍機關少監又ハ大機關士

軍醫長主計長等

四、團長ハ司令長官ニ隸シ部下ヲ統率訓練シ軍紀風紀ヲ維持シ兵備ヲ監理シ團務ヲ統理ス

五、水雷團ニ敷設隊及艇隊ヲ置ク

六、敷設隊ハ海中水雷防禦ノコトヲ掌ル

七、艇隊ハ海上水雷移動防禦ノコトヲ掌ル

八、敷設隊艇隊ニハ各一隊毎ニ左ノ職員ヲ置ク

敷設隊

司令 海軍少佐若クハ大尉

分隊長 海軍大尉

艇隊

司令 海軍少佐若クハ大尉

艇長 海軍大尉

前記ノ外職員トシテ海軍少尉ヲ置キ又必要ニ應ジ大機關士及少機關士ヲ置ク

九、敷設隊司令ハ團長ノ命ヲ受ケ敷設隊ヲ指揮シ部下ヲ監督訓練シ軍紀風紀ヲ維持シ兵備ヲ監理シ及隊務ヲ掌理ス

十、分隊長ハ司令ノ命ヲ受ケ各部員ノ長トナリ部員ノ紀律ヲ維持シ分擔ノ防備ヲ整頓シ及教育訓練ニ關スルコトヲ掌ル又先任分隊

長ハ司令事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

二、艦艇司令ハ團長ノ命ヲ受ケ艦隊ヲ指揮シ部下ヲ監督訓練シ軍紀風紀ヲ維持シ兵備ヲ管理シ近海水路ノ情況ヲ熟知シ及除務ヲ掌理ス

三、艇長ハ司令ノ命ヲ承ケ乗員ノ紀律ヲ維持シ之ヲ統率訓練シ兵備ヲ整頓シ艇ノ保安ニ任ジ一切ノ艇務ヲ掌理ス

四、軍港要港外ノ港灣ニシテ水雷防禦ヲ要スル所ニハ附近水雷團ヨリ敷設隊若ハ艇隊ヲ分置シ其ノ所在地名ヲ冠稱スルコトアリ

本條ノ敷設隊又ハ艇隊ハ平時ニ於テ之ヲ所轄スル水雷團中ニ置クコトヲ得

五、艦隊其ノ他ニ所屬スル敷設隊艇隊ニアリテハ其ノ隊ノ任務職員等ニ關スルコトハ前諸條ノ例ニ據ル

附 則

一、本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

二、明治二十二年勅令第四十七號水雷隊條例ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

水雷團ノ編制組織ハ其ノ後小改正アリ三十年十月二十八日、三十一年六月二十五日、三十五年七月二十四日、三十八年十二月十一日ノ改定ヲ以テ其ノ主ナルモノトスルモ何レモ部分的改定ニ過ギザリシガ三十九年二月二十七日海軍大佐木村浩吉ハ水雷團ノ改革ニ關シ左記意見ヲ提出セリ

水雷團ノ改革ニ關スル意見

明治二十九年二月二十七日 海軍大佐 木 村 浩 吉

日露戰役ノ經驗ト海軍將來ノ發達ノ爲百事革新ヲ要ス是レ水雷團ヲ從來ノ儘ニ附スルヲ得ザルトコロナリ蓋シ水雷團ハ創設已來幾多ノ改革ヲ經テ今日ニ至リタルモノナレバ敢テ大改革ノ要ヲ見ズト雖鎮守府管下ニ於ケル水雷ニ關スル事物ニシテ合類統一シ得ルモノアレバ之等ヲ許ス限リ合スルニ於テハ經費ヲ減ジ實効ヲ擧グルコト多カラン又監理上及教育上ノ便益多カルベシ凡ソ學術ノ研究ハ專問ナルヲ要シ經濟ハ共同的ナラザルベカラズ而モ戰役ノ施設若クハ改革ハ戰役ノ經驗ニ鑑ミ最モ實用的ナラザルベカラザルト共ニ最モ意ヲ經濟ニ注ガザルベカラズトセバ現制水雷團ヲ改革スル必要アルガ如シ

水雷團ヲ如何ニ改革スベキカ水雷團ハ水雷防禦ノ本務ヲ有スル處之ニ左記事項ヲ能ク限リ賦課セシムルヲ改革ノ目的トス

一、水雷團ヲシテ水雷母艦兵裝艦裝ノ準備アラシムルコト

二、水雷團ヲシテ水雷特科兵ノ屯在所タラシムルコト

三、水雷團ニ驅逐艦隊、潜水艇隊ヲ防屬セシムルコト水雷艇隊ノ如クナラシムルコト

一、水雷團ヲシテ水雷母艦兵裝艦裝ノ準備アラシムルコト

完全ナル母艦ヲ平時ニ備ヘ置クコトハ望ム所ナリト雖種々ノ理由アリテ許サレザルニ於テハ必要ニ臨ミ母艦ヲ兵裝艦裝スルニ當リ平素團内ニ於テ教場及工場ニ用フル諸器具及倉庫品ヨリ浴室酒保等ノ微不至ル迄補缺員ト共ニ母艦ニ移スノ準備ハ豫メ爲シ易クシテ實際上利益アリ従ツテ經濟的ナリ若シ水雷團ニ母艦ニ必要ナル小修理工場及材料アランニハ驅逐艦、水雷艇ノ重大ナラザル修理ヲ自ラ行ヒ得ベク之ニ從事スル定員補缺員ヲシテ自然工業ニ慣熟セシムルヲ得バ教育上ノ利益大ナリ

又平常水雷艇驅逐艦潜水艇ノ修理ヲナス爲共ノ經驗ニ依リテ母艦ニ必要ナル材料及諸器具並ニ職工ノ種類員數モ自ラ明白トナリ母艦整備上經濟的ナルベシ

母艦ニ備フベキ十二斤以下ノ大砲ヲシテ構内ニ備付ケ之ヲ教練上ニ用ヒンニハ多數ノ兵員ヲ教育シ得ベシ水雷艇ノ如キ狹隘ニシテ到底砲術ヲ正則ニ教授シ難キ缺點ヲモ除去シ得ベシ即チ水雷及大砲操練ノ如キハ狹隘ナル艦艇内ニ於テ實地的慣熟ヲ爲サシムルコト元ヨリ必要ナルモ初歩ノ正則教育ハ上記ノ方法ニヨルテ大切ト認ムルモノナリ

二、水雷團ヲシテ水雷特科兵ノ屯在所タラシムル事

海兵團條例第三條ニ艦船團其ノ他各部ノ勤務若ハ練習等ヲ免ジタル海軍下士卒ハ海兵團ニ入團セシメ艦船團其ノ他各部定員ノ補缺ニ充ツ之ヲ補缺員ト稱ス補缺員ハ臨時ノ業務ニ服セシムルコトヲ得トアリ又海兵團職員勤務令第五條ニ團長ハ補缺員ヲ教育訓練スルコトニ關シテハ定員ト疎隔ナキヲ要ストアリ之等補缺員中ニハ種々ノ兵種アリ特科兵アリ現時何レノ海兵團ニ於テモ新兵ノ教育ノミニ専心從事スルモ監督士官ノ少數ト教育材料ノ不足ニテ意ノ如クナラザル時ニ當リ常ニ新陳交代スル補缺員ニ對シ教育ヲ施シ難ク況ンヤ特科兵ヲシテ其ノ智識ハ備テ發達セシムルコト到底不可能ノコトナリ然レドモ右特科兵中ノ掌水雷兵、水雷工ヲ移シテ

水雷團ニアラシメバ艇隊及敷設隊ニテ教育シ又ハ使役スルヲ以テ相互ヲ益スルコト擧テ數フベカラズ即チ海兵團ニテ空過スベキ月日ハ智識伎倆ヲ實地的ニ練磨發達セシメ各自ヲ益スルノミナラズ水雷團ヲシテ常ニ特科兵缺員ノ爲手入ニ教育ニ苦ムコトナカラシムルヲ以テ所謂一舉兩得ノ事タリト信ズ

三、水雷團ニ驅逐艦隊潜水艇隊ヲ附屬セシムルコト水雷艇隊ノ如クナラシムルコト

驅逐艦ハ其ノ形體ノ小ナルガ爲教育ニ起居ニ治療ニ修理ニ貯藏ニ對シテ相當ナル機關若ハ容積ヲ有セザルモノナリ其ノ主要兵器タル魚形水雷ノ調整モ縱舵調整器ノ調整モ水雷團若ハ工廠ニ於テ差支無キ時間内ニ於テ便宜ヲ與フルニアラザレバ實際ニ困難スベク又極メテ些細ナル修理モ規定ノ手續ヲ爲シ工廠ニ請求セザルヲ得ズ乘員ノ衛生ニ對シテ酷暑嚴寒ヲ通ジテ特ニ願慮ヲ要スベシ軍港ニ在ルモ碇泊場ハ海岸ト隔リ交通便ナラズ右擧グル諸件ハ乘員ニ不利益ナルト共ニ海軍ノ爲ニモ不經濟ナリト認メラル又平時ニ於テ潜水艇數隻ニ一母艦ヲ附スルハ不經濟タルヲ免カレズ若シ陸上ニ燃料油貯藏庫及修理工場電氣及壓搾空氣配給場ヲ設ケ其ノ出動ノ節ハ水雷團ニ備フル三〇〇噸級漁船ヲ附スルニ於テハ乘員ノ食事宿泊丈ハ差支無カラシムルコトヲ得ベシ且軍港碇泊中ハ水雷艇ト共ニ繋留池ニアリテ風波ヲ避ケシムルヲ得策トス其ノ事務所及乘員ノ宿泊所ハ水雷團ニ設クルノ差支ナキコトハ潜水艇隊職員勤務令第七條ニ母艦ト同所ニアラザルトキハ陸上ニ宿泊セシムルコトヲ得トノ規定アルニ由リテ証シ得ベシ平時ニ於テハ驅逐艦潜水艇ヲシテ水雷艇ノ如ク水雷團ニ附屬セシメ萬事ヲ共用的ニ爲スコトハ當ニ經費ヲ節約スルノミニアラザルベシト信ズ

同年三月海軍教育本部ニ於テ驅逐艇隊訓練調査委員會ヲ開設セシガ同委員會ノ決議ニ於テ水雷團組織ニ關シ言及セルトコロ左ノ如シ(第四編第八章「艇隊、驅逐艇、水雷戰隊ノ一般訓練」參照)

一、各鎮守府要港部所屬ノ驅逐艇隊ヲ一團トナシ之ニ指揮者ヲ置キ教育訓練ヲ統一スルコト

二、鎮守府ニ在リテハ現制水雷團ノ團長ヲシテ右ノ指揮官ニ當テ敷設隊ハ別ニ獨立スルカ或ハ適當

ナル防禦部隊ニ屬セシムルコト

明治三十九年十一月二十一日新水雷團條例ヲ裁可シ之ヲ公布セシメラル即チ從來驅逐隊ガ鎮守府司令官若クハ要港部司令官ノ直屬ナリシヲ水雷團長麾下ニ入レタルニ由ルモノニシテ本條例改定ノ主要點次ノ如シ

水雷團條例

第一條 各軍港ニ水雷團ヲ置ク

水雷團ハ其ノ所在ノ地名ヲ冠稱ス

第二條 水雷團ハ當該鎮守府ニ屬シ驅逐隊艇隊敷設隊ヲ統轄ス

第三條 水雷團ニ左ノ職員ヲ置ク

團長、副官、機關長、軍醫長、主計長

前項ノ外必要ニ應ジ水雷團附トシテ機關官、軍醫官、及主計官ヲ置クコトヲ得

第五條 團長ハ必要ニ應ジ第三條第二項及第十六條(兵曹長以下ノ者)ノ職員ヲ部下ノ驅逐隊、艇隊、敷設隊ニ配置シ又ハ驅逐艇

水雷艇ニ乘組マシムルコトヲ得

第六條 團長ハ必要ニ應ジ部下ノ敷設隊編逐艇又ハ水雷艇ノ職員ヲ臨時部下ノ他ノ敷設隊、驅逐艇又ハ水雷艇ニ配置スルコトヲ

得

理由

驅逐隊ヲ水雷團長ニ屬セシムルコトニ改正スルハ各隊個々ニ鎮守府司令官ニ隸スルヨリハ之ヲ取經メテ一指揮官ノ直接監督ノ下ニ在ラシムルヲ以テ教育訓練並ニ任務上有利ナリト認メ亦從來驅逐艇ガ陸上倉庫及水雷調整場等ヲ領有セザリシガ爲甚シク不愼ヲ感セシガ本改正ニ依リ之等ノ不利ヲ避クルヲ得ベシト認メ又水雷團長ヲ部下諸隊ノ司令官タル位置ニ昇進セシメ艇隊司令及敷設隊司令ハ獨立部隊長ト同等ノ資格ヲ保タシムルコトニ改正セルハ水雷團ノ擴張ニ伴ヒ斯ノ如クスルヲ最モ適當ナリト認ムルニ依ル

同四十一年十一月三十日豫備艦隊ノ制度ヲ廢シ新ニ豫備艦隊ヲ設ケ鎮守府麾下ノ豫備艦全部ヲ以テ豫備艦隊ヲ編成セシガ水雷團所屬ノ艦艇ハ依然從前ノ通取扱ハレタリ然ルニ先ニ三十九年十一月水雷團條例改定已來其ノ實迹ヲ見ルニ必ズシモ良好ナラズ驅逐隊ハ勿論艇隊ノ如キモ驅逐隊ト共ニ寧ロ豫備艦隊ニ編入スル等現行水雷團制度ヲ根本的ニ改革セントスルノ聲漸ク喧ビシク次記第一艦隊參謀長秋山眞之意見ノ如キ之ヲ代表スルモノナリ左ノ如シ

水雷團ヲ廢シ其ノ驅逐艇隊ハ豫備艦隊ニ編入シ敷設隊ハ獨立セシムル意見

明治四十四年十一月 第一艦隊參謀長 秋 山 眞 之

抑モ現時水雷團ノ本體ハ驅逐艇隊ト敷設隊ノ結合ヨリ成リ此ノ兩者ハ其ノ素質ニ於テモ亦其ノ用途ニ於テモ全然相反セルモノニテ一ハ攻撃他ハ防禦テ目的トシ又一ハ海上移動的ニシテ他ハ陸上固定のナルノミナラズ其ノ使用スル兵器モ名ハ同ジク水雷ナルモ全ク異質ノモノナリ此ノ如キ相容レザル兩者ヲ合シテ一團ト成シ一指揮ノ下ニ經理運用セントスルハ實ニ至難ノ事業ニシテ水雷團組織ノ不利不便ハ主トシテ此ニ起因セルガ如シ今左ニ同團組織ノ不利不便ニシテ其ノ存立ノ必要ナキ理由ヲ列記ス

一、一朝有事ニ際セバ驅逐艇隊ハ悉ク海戰部隊若ハ警備艦隊ニ編入セラルルガ故ニ戰時ニ於テ水雷團長ノ指揮下ニ殘ルモノハ敷設隊ノミナリ然ルニ敷設隊ニハ司令アリテ直接ニ指揮統率セラルルノミナラズ間接ニハ鎮守府長官ノ最高指揮ノ下ニ作業シ事足ルモノニシテ更ニ此ノ間ニ水雷團長ヲ介立シ置クノ必要ナク一隊ニ二個ノ指揮官ヲ置キタルト同一ノ惡果ヲ來スベシ故ニ水雷團ハ戰時ノ目的ニ對シテハ全然其ノ必要ナキモノト認メテ可ナリ

二、驅逐艇隊ノ平時ニ於ケル教育訓練ハ爲シ得ル限り外海ニ於テ行ハシメザルベカラズ然ルニ之ヲ監督指導スベキ水雷團長ガ陸上ニ在リテハ適確ニ其ノ責任ヲ盡ス能ハザルハ當然ノコトニテ本來無理ナル要求ナリ今若シ之ヲ豫備艦隊ニ附屬シ置ケバ射撃ニアレ魚雷發射ニアレ又演習ニアレ凡テ豫備艦隊司令官監視ノ下ニ施行セラレ其ノ成績ヲ擧グル上ニ於テ効果甚大ナル

ベシ加之戰時ノ要求ニ應ズル爲驅逐艇隊ハ出來得ル丈軍艦ト行動ヲ共ニシ音ニ隨伴運動襲撃運動等ヲ練習スルノミナラズ朝夕之ニ接近シテ水雷防禦上ノ弱點又ハ探照ニ對スル潛行等ヲ研究シ之ト同時ニ軍艦モ亦之ニ對スル防禦法ヲ攻究シ双方相須テ適切ニ練習スルヲ要ス然ルニ一軍艦ヲモ有セザル水雷團ハ他ノ助力ニ須ツノ外此ノ種ノ教練ヲ行ハシムル能ハザルナリ是レ平時ニ於テ驅逐艇隊ヲ水雷團ニ屬スルヨリ生ズル不利ノ一ツナリ

三、驅逐艇隊ノ海上生活ニ不便不足ヲ感ズルハ尋常ノ海上勤務ヨリ遙ニ大ナルコト言フテ俟タズ故ニ其ノ不便不足ノ多キ丈尙ホモ能ク其ノ乘員ヲシテ此ノ困難ナル生活ニ慣レシメザルベカラズ然ルニ之ヲ陸上勤務ノ敷設隊ト共ニ水雷團ニ屬シ勤務上ノ必要ヨリ屢々陸上ニ往復セシムルトキハ不知不識ノ裡ニ陸化セラレテ海洋ノ艱苦ヲ厭フニ至ルベキハ人情自然ノ結果ニシテ現ニ驅逐艇隊乘員ノ氣風ガ軍艦ノ乘員ヨリモ陸奥ヲ帶ビ居ルコトニ依リ證明セラルルナリ惟フニ近時驅逐艇水雷艇ノ海上ニ於ケル遭難事例ノ多キハ一ハ陸化シタル乘員ガ俄ニ海上ニ出テテ其ノ勤務ニ耐ヘザルニ原因スルナラン是レ驅逐艇隊ヲ水雷團ニ屬スルヨリ生ズル不利ノ二ナリ

四、現行制度ニテハ驅逐艇隊ノ會計給與醫務衛生ハ水雷團主計長軍醫長ノ所掌タルモ事實上ニ於テハ凡テ隊附主計官軍醫官ガ之ヲ處理セルモノナリ然レドモ手續上主計長及軍醫長ヲ經由スルヲ要シ之ガ爲屢々陸上ト往復シ獨リ其ノ煩雜ナルノミナラズ處理遲滞シテ出港間際等ニ應急スル能ハザル實例多シ而テ此等ノ隊附主計官及軍醫官ハ戰時ハ勿論平時出動ノ場合等ニモ責任官吏トナルベキモノナルモ現制度ニテハ其ノ素養ヲ平時ニ習得セシムルコト能ハザルナリ是レ驅逐艇隊ヲ水雷團ニ屬スル不利ノ三ナリ

五、軍事萬般又經濟ニ注意セザルベカラズ現制度ノ如ク各軍港ニ水雷團ヲ設置スルトキハ其ノ臨時經常ノ費額ハ決シテ尠々ニアラズ加之其ノ陸上設備ノ多クハ敷設隊ニ對スルモノノ外戰時ニ不要ノモノナリ若シ之ヲ豫備艇隊及其ノ附屬母艦等ニテ辨ズルヲ得バ其ノ儘戰時ニモ移動利用シ大ニ經費ヲ節減シ得ルナリ軍港ニハ豫備艦倉庫モ病院モアリ水雷團ニ限り特ニ大倉庫大病室ヲ要スベキ筈ナシ驅逐艇ノ如キハ大概ノ事物凡テ軍艦同様艦内ニテ所辨シ得ルニ拘ラズ慣習性ヲ成シテ潛水艇ノ母艦ニ對スル如ク陸上設備ニ倚賴スルノ傾向アリ之レ啻ニ經費ノ損失ヲ増加スルノミナラズ他日海洋ニ活動スベキ艦艇ノ獨立心ヲ

涵養スル所以ニアラザルナリ

如上ノ理由ニ依リ小官ハ寧ロ水雷團組織ヲ全廢シ其ノ驅逐隊艇隊ハ豫備艦隊ニ屬シ敷設隊ハ獨立シテ鎮守府長官ニ直屬セシムルヲ可ナリト認ム而テ現組織ニテ驅逐隊艇隊ガ利用セル陸上ノ魚雷收納所同調整場及倉庫等ハ其ノ儘豫備艦隊ノ所屬ニ轉換シ又爲シ得レバ各軍港ニ一隻ノ水雷母艦ヲ常置シ之ヲ豫備艦隊ニ附屬サルレバ更ニ其ノ利便多カラント信ス

尙右ニ類似ノ意見ハ已ニ三十一年十月海軍少將新井有貫ニ依リ唱道セラレ主トシテ敷設隊ト艇隊トハ全然分離獨立スベキヲ説ケリ(別紙第一參照)

之ヨリ先キ明治三十七年一月十二日松眞ニ假根據地防備隊ヲ置キ同年十二月十五日鎮海防備隊トナリ又翌三十八年一月二十七日元山防備隊條例ヲ定メ同年二月十五日ヨリ施行セシガ四十年九月三十日軍令海一號ニヨリ新ニ防備隊條例ヲ定メ鎮海灣及永興灣ニ防備隊ヲ置キ鎮海防備隊及永興防備隊ト稱シ佐世保鎮守府ニ屬セシメタリ然ルニ越ヘテ大正二年三月二十四日軍令海第五號ニ依リ防備隊條例ヲ改定シ之ガ施行ヲ命ゼラル理由左ノ如シ

軍港要港ノ局地海面防禦ニ任ズル部隊ハ其ノ編制ノ大小ニ拘ハラズ總テ之ヲ防備隊ト改稱シ簡明ナラシムル爲本條令ノ改正ヲ要ス同時ニ水雷團條例及敷設隊條例ハ之ヲ廢止シ新銳ノ驅逐隊ハ之ヲ新設ノ水雷隊ニ編入シ老齡ノ驅逐隊及艇隊潜水艇隊ハ防備隊ニ附屬セシムルヲ原則トセリ

防 備 隊 條 例 摘 要

- 一、軍港及要港ニ防備隊ヲ置ク、防備隊ハ其ノ所在地名ヲ冠稱ス
- 二、防備隊ハ當該鎮守府又ハ要港部ニ屬ス但シ鎮守府ヲ置カザル軍港又ハ要港部ヲ置カザル要港ノ防備隊ハ其ノ所在海軍區ヲ管スル鎮守府ニ屬ス

- 三、防備隊ハ海面防禦及掃海ノ事ヲ掌リ又海兵團同所ニ在ラザルトキハ當該軍港又ハ要港ノ警備及陸上防火ヲ兼掌ス
- 四、防備隊ニハ必要ニ應ジ驅逐隊、艇隊、潜水艇隊及艦船ヲ附屬セシム
- 五、防備隊ニ左ノ職員ヲ置ク
司令、司令官、分隊長、機關長、軍醫長、主計長
- 六、司令ハ鎮守府司令長官又ハ要港部司令官ニ隸シ部下ヲ統率訓練シ軍紀風紀ヲ維持シ隊務ヲ掌理ス
- 七、將校分隊長ハ司令官又ハ司令ノ命ヲ承ケ各部員ノ長トナリ隊員ノ紀律ヲ維持シ分擔ノ防備ヲ整頓シ且教育訓練ニ關スルコトヲ掌ル
- 八、機關長ハ司令官又ハ司令ノ命ヲ受ケ部下ノ紀律ヲ維持シ其ノ教育訓練ニ任ジ機關並ニ其ノ主管ニ屬スル船體及兵器ニ關スルコトヲ掌ル
- 九、機關官分隊長ハ司令官又ハ司令ノ指定ニ依リ機關長ノ命ヲ承ケ隊員ノ規律ヲ維持シ教育訓練ニ任ジ又機關船體及兵器ニ關スルコトヲ分掌ス
- 十、戰時又ハ事變ニ際シ特ニ設置スベキ防備隊ハ別ニ定ムルトコロニ依リ常設防備隊ヨリ隊員ノ一部ヲ分派シ之ヲ基礎トシテ編制スルモノトス
- 前項ノ特設防備隊ニ關スル事務ハ平時ニアリテハ前項ノ常設防備隊ニテ之ヲ處理ス
- 十一、艦隊其ノ他ニ防備隊ヲ附屬セシムルトキハ本令ヲ準用ス此場合ニ於テハ鎮守府司令長官又ハ要港部司令官ノ職權ハ直屬長官之ヲ行フ

附 則

本令ハ大正二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

水雷團條例及敷設隊條例ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

同年三月二十五日達第三十六號ヲ以テ防備隊職員勤務令ヲ改正セリ

防備隊職員勤務員摘要

- 一、司令ハ水雷敷設部員及掃海部員等ヲ定メ所屬長官ニ報告シ又其ノ隊ノ内規ヲ定メ所屬長官ノ承認ヲ經テ之ヲ實施スベシ、軍港要港ノ警備及陸上防火ノ任務ヲ有スル防備隊ノ司令ハ警衛部員及防火部員ニ關シ亦同ジ
- 二、司令ハ水雷敷設部員掃海部員等ニ基キ部下ノ下士卒ヲ數個ノ分隊ニ編戒スベシ
- 三、司令ハ所員ノ雜役船及敷設掃海要員ヲ彙備シ又防禦海面ノ狀態ヲ知悉シ迅速敷設掃海ニ支障ナカラシムベシ
- 四、司令ハ前諸條ニ規定セザル事項ニ就テハ適用シ得ル限り軍艦職員勤務令中艦長ニ對スル規定ニ據ルベシ
- 五、分隊長、機關長、軍醫長、主計長其ノ他諸職員ハ適用シ得ル限り軍艦職員勤務令ノ規定ニ依リ服務スベシ
- 六、戰時又ハ事變ノ際特設セラレタル防備隊ノ職員勤務ニ關シテハ本令ノ規定ヲ準用ス

附 則

本達ハ大正二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

水雷團職員勤務令及敷設隊職員勤務令ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

因ニ記ス大正二年別ニ水雷隊ノ創設ヲ見シガ本制度ハ既記明治二十二年創設ノ水雷隊トハ全然同名異質ニ屬シ而カモ前記防備隊トモ其ノ選ヲ異ニスルモノナリ其ノ詳細ハ第四編第八章ニ掲記セリ